

# 大 学 史 研 究 通 信

第 107 号 2023 年 6 月 6 日 (火)

大学史研究会

第 107 号の内容：会員情報、新入会員 自己紹介、会員情報の収集について、2023 年度第 46 回大学史研究セミナーについて、研究交流企画の募集について、訃報、潮木守一氏への追悼文、運営委員会からのお知らせ、次期運営委員候補者の推薦委員会立ち上げについて、2023 年度会費納入について、退会者の報告、編集後記、大学史研究会運営委員・事務局員一覧

## 会員情報

### 新入会員

松崎 亜耶 会員

所属：東京大学 人事部

木野 涼介 会員

所属：京都大学 大学院教育学研究科 博士後期課程

吉田 翔太郎 会員

所属：山梨大学 アドミッションセンター・東京大学 大学院教育学研究科 博士課程

### 異動会員

原 圭寛 会員

新所属：昭和音楽大学

岩垣 真人 会員

新所属：奈良県立大学 地域創造学部

(会員情報担当：船勢肇)

## 新入会員 自己紹介

### 松崎 亜耶 会員

東京大学に事務職員として勤めております、松崎亜耶と申します。学生時代に社会教育や生涯学習を中心に学び、大学の社会貢献・社会連携機能に関心を持ったことが大学業界を志したきっかけです。大学史については、戦前における大学課外活動の実態を西洋文化の受容・供給や市井の人々との関わりといった視点から分析し、修士論文としてまとめました。大学という存在に対する理解を歴史研究という切り口から深めていきたいと思っております。皆様のご指導を賜りますようお願い申し上げます。

### 木野 涼介 会員

京都大学大学院教育学研究科教育学環専攻教育史学コース博士後期課程の木野涼介と申します。近代日本における看護学の高等教育化、とくに新学制下における大学化や「学界」の形成を対象としつつ、近代における「学知」の成立過程をも描画したいと考えております。修士課程までは日本史学を専攻しておりましたため、実証史的な方法論に馴染んでおります。未熟者ではございますが、どうぞご指導たまわれますようお願い申し上げます。

## 吉田 翔太郎 会員

この度、入会させていただきました吉田翔太郎と申します。現在、山梨大学アドミッションセンターに勤務しながら、今年4月から東京大学大学院教育学研究科の博士課程に在籍しています。修士論文では、1930-40年代のアメリカにおける大学教員養成と大学院教育について、主に大学団体や連邦教育局の議論を明らかにし、それを「教育対研究」の議論の萌芽という観点から考察しました。今後は同じテーマを探究し、時代や対象団体を広げながらさらに検討していきたいと考えています。ご指導のほど、よろしくお願いいたします。

(会員情報担当：船勢肇)

### 会員情報の収集について

大学史研究会では、総会で議論し、通信でお伝えいたしましたように、会員情報の確認・更新作業を行っております。同時に、日本学術会議協力学術研究団体への登録に向けて準備を進めております。これに伴い**6月30日(金)までに**みなさまの会員情報の提供をお願い申し上げます。

大学史研究会では、お預かりした個人情報について、以下のとおり個人情報保護法の趣旨に則って、適正かつ安全に管理・運用することに努めます。

#### 1. 利用目的

収集した個人情報について、研究会の活動上必要な範囲以外の目的で個人情報を利用しません。

#### 2. 第三者提供

本人の同意を得た場合や法令に基づく場合を除き、個人データを第三者へ提供することはありません(ただし、会員を対象に名簿を作成し送付いたします)。

#### 3. 開示請求

個人情報について、ご本人には、開示・訂正・削除・利用停止を請求する権利があります。

この会員情報の収集については、原則として下記の専用フォームでご記入いただきます。



なお、紙媒体でのご回答をご希望の方は、会員情報担当の船勢(funasehajime@gmail.com)までご住所をお知らせ下さい。記入用紙を送らせていただきますので、ご記入の上、ご返送をお願いいたします。大変恐縮ですが、ご返送の際の郵便料金は各自でご負担ください。

大学史研究会では今後の研究会の継続的な発展のために経費節減、事務局の負担軽減のため、今後『大学史研究通信』の電子化を検討しております。今回お教えいただいた会員情報は電子化への対応など、会員サービスの向上にも役立てて参ります。お手数をお掛けいたしますが、どうぞよろしくお願いいたします。

(会員情報担当：船勢肇)

## 2023 年度第 46 回大学史研究セミナーについて

本年度の大学史研究セミナーは、11 月下旬～12 月上旬頃、対面にて行います。会場校については現在交渉中ですが、東京都内を予定しています。

詳細は、次号通信にてお知らせいたします。2019 年以来、久しぶりの対面となります。多くの方とお会いできることを楽しみにしております。

(セミナー担当：山本珠美、事務局長：山本尚史)

## 研究交流企画の募集について

コロナ禍以前には、会員間の研究交流の活性化を図るため、勉強会や読書会、書評会など多様な研究交流企画が行われていました。学術研究の世界もオンラインによる学会・研究会等の開催、ハイブリッド方式による場所を問わない交流の空間が生まれています。昨今の状況を鑑み、研究交流企画について、広く会員のみなさまのアイデアを公募し、再開していきたいと考えております。

企画の内容は、応募者の研究紹介、会員著作・論文の合評会、科研費取得者等による研究経過報告会、ミニシンポジウム、あるテーマに絞った勉強会（1 回でも複数回の継続開催でも可）、修士論文の講評会など多様な形態を想定しています。

開催にあたっては、研究費等の適正な使用ルールに則り、そして応募者の勤務大学等の規則に従い、大学史研究会の主催として研究交流企画を開催いたします。この企画では、開催条件によっては、運営委員等による会場の貸し出し等を行います。開催形式は、対面に限らず、オンライン、ハイブリッド形式による開催も可能です。

会員の皆さまの多様な研究関心から構想された企画を募集致します。大学院生の皆さまによる企画も大歓迎です。みなさま奮ってご応募ください。まずは再開後の最初の企画ということもあり、本年 8 月～9 月に原則として 3 件の開催を予定しています。応募者多数の場合は、運営委員会において審査をし、研究交流企画を決定させていただきます。

応募期間：本通信刊行後～2023 年 7 月 24 日（月）17:00

応募方法：研究会 HP に掲載の申請書をダウンロードし、事務局メール宛に提出

（事務局メール [jimu-kyoku@daigakushi.jp](mailto:jimu-kyoku@daigakushi.jp)）

応募資格：本会会員に限る（ただし共同研究の場合は研究代表者が本会会員であれば可とする）。

開催時期：2023 年 8 月～9 月

※今後の応募にあたっては、複数回の採択は可能ですが、広く会員に利用をしていただくためにも、一度採択された方は一定期間ご遠慮いただくことはご承知おきください。

※若手研究者の積極的な研究会での活躍を支援する意味でも、博士号取得後 5 年以内の会員、院生会員等を優先することがあります。

(事務局長：山本尚史)

## 訃報

すでに新聞報道等でご存知かと思いますが、長年に亘って大学史研究会の会員として活躍された潮木守一先生が、本年2月26日に逝去されました。ご冥福を心からお祈り申し上げます。大学史研究セミナー等で、直接、警咳に接する機会があった方々も多いかと存じます。今回、潮木先生の学問的な盟友である寺崎昌男先生に弔文をいただきましたので、掲載させていただきます。なお、潮木先生の御略歴は、先生が長年、勤務されました名古屋大学で取りまとめられております。

<https://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/bpub/research/public/forum/09/15.pdf>

(運営委員長：坂本辰朗)

## 潮木守一氏への追悼文

潮木守一君を悼む——あの優秀な友へ

寺崎 昌男

朝日新聞が氏の訃報を載せたのはつい先日のことだった。逝去の2月26日から1か月以上が過ぎていた。葬儀は教え子の方たち数人に知らされただけだったと聞く。活発な研究活動をしてきた生前からすればまことに静謐な逝去だったのだと秘かに想像した。

「ルノー」というのが高校時代のニックネームだったそうである。結婚式のパーティーで横須賀高校の同級生たちが語っていた。このフランスの代表車は姿こそ小さいが大変能率的かつ優秀なのだそうである。1950年代半ばには東京や大阪のタクシーは競ってルノーを採用していた。小柄な潮木君はまさにそのルノーでした、と友人たちは語った。東大教養学部では理科生だったらしい。その彼が教育学部に進学すると届け出たとき、教務の窓口の職員から呼び出されて「不心得」を諭されたと言っていた。理科生としての成績もよかったに違いない。東大に入って教育学部に進むなど愚か極まる選択だと思われていた時代だった。

入学と進学は私の方が2年早かったが、こちらが事情で休学していたため、1956年に復学すると2年下のクラスに入った。そのクラスでひとときわ優秀だったのが潮木君だった。共に学ぶこと1年ののち二人とも大学院に進んだ。だが彼は教育哲学・教育史ではなく教育社会学を選んだ。意外な選択だった。彼の卒論は日本近代実業教育史に関する研究だったから、当然教育哲学・教育史コースに進むと思っていたからである。

ところが彼はすぐに修士課程を退いて教育社会学研究室の助手に採用された。優秀な卒業生を直ちに助手に採用して囲い込むという法学部式の人材育成方式が、珍しくも人文科学研究科教育学専攻課程の教育社会学コース（当時の呼称）で取られたことになる。それも彼の卒論が牧野巽・清水義弘という教育社会学担当教授たちの目に止まったかららしい。10数年後、ある週刊誌が「大学教授が見た思い出の卒論」とかいうアンケート式の特集記事を組んだ。登場者の一人だった清水教授は潮木君の論文を在任中最も印象的なものだったとして挙げ、「確実な資料をもとに明確な論理性をもって簡潔な論文を作成した能力は、将来の大器を予想させた」と記していた。予想は見事に実現していったことになる。

この「大器」が大学史の場に姿を現したのは1971年8月に鳥取大山で開いた第6回セミナーの席であった。彼はそのころ名古屋大学で活躍中だったと思う。自転車ツアーにも嬉々として加わったが、発表の合間には校正刷りを広げて作業にふけていた。聞くと、のちに学位論文になった『近代大学の形成と変容』（1973年、東大出版会）の校正だった。

この本の書評会は2年後73年の名古屋の第9回セミナーで行い、大いに論議が沸いた。な

ぜか恒例の録音をすることができず皆川卓三先生のメモが残されているだけだが、司会の横尾壯英先生が冒頭で「これは社会学と史学とのみごとなドッキングを示す著作。我が国大学史研究が、その研究啓蒙期から本格的な研究期への移行を示す一つのメルクマールを示す」と絶賛するところから始まって、高等教育機関と大学との違い、大衆化と大学政策の関係、大学史と学生史の関係等々をどうとらえるかといった、それまでのドイツ大学史の呪縛から解放されたような論点が次々に浮かび、2日間にわたって熱い論議が続いた（旧『大学史研究通信』第7号、1973年12月刊）。潮木君はのちに『キャンパスの生態誌』（1986年）『アメリカの大学』（1993年）『世界の大学危機』（2004年）などの比較大学論や大学史を書いたが、最も重厚な代表作はやはりこの『形成と変容』ではあるまいか。

もう一つ代表作を挙げよといわれれば、私は『京都帝国大学の挑戦』（1984年、名古屋大学出版会）を挙げる。その評は日本教育学会から頼まれたが、あれほど紹介しがいのある本はなかった（『教育学研究』52巻2号、1985年2月刊）。

「B判200頁余に過ぎず、ややジャーナリスティックな題名のついたこの本を本誌の書評欄に取り上げることに奇異の想いを抱かれる向きもあるかも知れない。しかし評者のみるところ本書は紛れもなく研究書であり、書き流しの「啓蒙」書ではない。それどころか、教育学界には珍しいドラマ性を持つ史的モノグラフィーである」。

こういう書き出しから始めて、法学教育改革を軸としドイツ大学の教授法移入競争を配する東京・京都両法科大学の競争を叙したこの物語がいかにも優れた史論であるかを、懸命に紹介した。大学史研究セミナーで得た自由闊達でアカデミックな論法と実証的な資料収集とを何とか教育学界に持ち込めないかと願っていたからである。

この本を読むにつけても、歴史研究としての約束事はきちんと守りながらもその上に推論をあえてし、これを明確に、また文学的に叙述する潮木君の歴史家的想像力と筆力とに感嘆せざるを得なかった。両大学間の一時期の緊張状態を描きながら、ドラマチックな一幕を事件史ではなく大学史に仕上げていく力量。それは今後めったに出てくるとは思えない。優れたトルソーはよく全姿態を語る、というのが当時の感想であり、潮木君はそのトルソーを刻み出す希少な工匠であった。

教育社会学関係の彼の仕事についてはいずれ整理される日が来るだろう。かつて広島大学新堀通也研究室で教育社会学者相互のサイテーション係数を調べられたところ、群を抜いてトップだったのが潮木君だったという噂を聞いた。多分真実だと思う。高等教育史や大学史は、ありていに言えば余業だったかもしれない。だが彼は、固有のディシプリンをはみ出しでも行くところ遮るものを許さない、いわば装甲したルノーだったのだろう。もう少し人生の苦勞を積めば大佛次郎賞を手にしていただろうかもしれない・・・そういう冗談を言い合うすべもない日がこんなに早く来ようとは。

この一文を記すのは、2年の年長者である私にとって限りなく辛いつとめであった。

〈2023年4月25日〉

## 運営委員会からのお知らせ

### 運営委員会からのご報告とお願い

2023年5月13日(土)に運営委員会を開催した。吉野剛弘運営委員から事前のメールによる打合せで、「物事を決するには時にサクサクいかない方がよい場合もあるようにも思います」という、完全オンライン会議への危惧が表明されたこともあり、今回は、対面とオンラインを併用したハイブリッド方式での会議となった。結果として、参加した委員からは“不規則発言”さらには“歎きやぼやき”が続出し、福岡から上京された山本尚史事務局長の巧みな采配にもかかわらず、会議終了までかなりの予定時間オーバーとなった。しかし、これらの自然に起こった発言には、うっかりすると見過ごしてしまうような案件から、大学史研究会の将来像にかかわるものなど、きわめて重要なものが多々あり、時間をかけた甲斐があったと私には思えた。すべてを報告するのが本欄の目的ではないので、ひとつだけ、以前からの懸案となっていた事項について、改めて、お願いを申し上げることにしたい。それは、会員数増加のためのキャンペーンである。

前年度の総会にて、会員数増加策を取り上げた際、それはおもに、『大学史研究』の編集発行費用という文脈を踏まえてのこと——現状のままでは早晚、編集発行が不可能になるということ——であった。だが今回は、次期運営委員の選出(あるいは前段階の、推薦委員会メンバーの選出)を議論した際にも、会員数増加が急務であることが、出席委員たちに共有されたのである。

現在、大学史研究会で会運営に関与している委員たちの数は、全会員数の10%を超えている。このことは、他の大規模学会に比べて、会員が、委員役職に就く可能性がきわめて高いことを意味している。だがそれは、見方を変えれば、常に多数の委員を確保しておかないと会の存続そのものが危うくなることでもある。運営委員会の継続性を担保するために、一部委員を再任したとしても、事態が大きく改善するわけではない。さらには、近年の大学教員へのさまざまな評価の中に、学会等の委員に就いていることが評価のポイントになっているわけであるが、その反面、多くの会員が、「研究、教育、学内業務だけで手一杯」という状況に置かれているわけであり、それほど簡単に委員就任を委嘱できるとは思えない。やはり、母数である会員総数を増加させる必要があるわけである。

前年度の総会でも、同趣旨のことを申し上げたわけであるが、会員の皆様から事務局へ入会推薦を寄せていただき、事務局の方から当該の方々に、直接、勧誘のお知らせをさしあげるといった方式の、会員数増加キャンペーンをおこないたい。具体的には、以下のとおりである。

- (1) 会員の皆様から、「〇〇大学(大学院)の××さんに入会を勧めてほしい」というメールを出していただく。宛先は事務局の代表メールである [jimu-kyoku@daigakushi.jp](mailto:jimu-kyoku@daigakushi.jp) で、要件欄は「入会推薦」。むろん、ハガキ等での通知も歓迎します。
- (2) 入会を勧める方の住所等の具体的な詳細は事務局が調査しますので、分からなくとも可です。
- (3) 事務局の方からは、入会推薦をしていただいた会員のお名前を「△△△△大学の□□□□氏から推薦がありました」といったかたちで明記しますが、これが必要なければ、そのように指示して下さい。

あらためて、会員の皆様には、本キャンペーンへのご協力を宜しくお願い申し上げます。  
(運営委員長：坂本辰朗)

## 次期運営委員候補者の推薦委員会立ち上げについて

昨年の総会でもご報告いたしましたように、2023年のセミナーをもちまして、現在運営委員の坂本辰朗、船勢肇、山崎慎一、山本珠美、山本尚史（以上、敬称略）の5名が2年の任期を迎えます。そのため新たな運営委員会を構成するために、推薦委員会を立ち上げ、5名の運営委員の改選について議することとなります。

現在、運営委員会では推薦委員会を立ち上げる準備を進めております。本来であれば改選前年の総会において推薦委員会の立ち上げが必要でしたが、総会時点でできておりませんでした。事務局を代表して深くお詫び申し上げます。

この不備への対応として、2023年5月13日（土）開催の運営委員会で審議し、「大学史研究会運営委員会の構成、選出方法に関する内規」の第6条「推薦委員会は7名を通例として組織し、過半は運営委員会以外から構成されるものとする。推薦委員会は、候補者の推薦にあたって会員に自薦・他薦を求めるなど、幅広く会員の総意が反映するよう努めなければならない。」に照らし、自薦他薦によって推薦委員会を立ち上げさせていただくことと致しました。

推薦委員会の構成は、上記の内規に則り、現運営委員から3名、会員の皆さまから4名選出させていただきます。そのため自薦他薦によって4名の推薦委員候補者を公募致します。公募の要領は以下の通りです。

1. 立候補受付開始（この通信の発行日）
2. 立候補受付終了：2023年7月10日（月）17:00まで
3. 推薦委員会の構成のご報告：次号通信（2023年8月刊行予定）
4. 推薦名簿を会員に発送（2023年11月中旬：セミナー号外に掲載）
5. 総会にて投票（2023年11月下旬～12月中旬）

※立候補される方は、7月10日（月）17:00までに事務局メールアドレスにご連絡ください。候補者多数の場合は、運営委員会において、候補者の専門分野等のバランスに配慮して選出させていただきます。

立候補届の様式は定めませんので、メール本文にて立候補の意思をお示しください。

事務局メール：jimu-kyoku@daigakushi.jp

（事務局長：山本尚史）

## 2023年度会費納入について

今年度の年会費納入についてお願いのご連絡を申し上げます。大学史研究会の実収入は、会員各位からの年会費に大きくよっております。会員の皆様の円滑な研究会運営へのご協力に感謝を申し上げます。引き続き、大学史研究会の発展と円滑な運営のため、会員各位のご理解ご協力をお願い申し上げます。年会費の納入の詳細につきましては、同封の納入依頼通知をご覧ください。

年会費は5,000円です。なお、大学院等在学あるいは日本学術振興会特別研究員の各位には、「院生・学生会費」として3,000円が適用されております。また、過年度分年会費未納の会員には、未納年度と本年度会費分を含めた金額総計を通知しております。年会費を3ヶ年度分以上滞納されている会員には、研究会の継続参加のご意志を年会費納入によって確認できるまでは、大学史研究会からの諸連絡、「研究通信」、「大学史研究」（紀要）等の発送の停止が決定しております。該当する会員へのご連絡通知には、これに関する事項が記載されておりますのでご留意願います。なお、本通知依頼発送と入れ違いに年会費を納入いただきました場合には、何卒ご容赦のほどお願い申し上げます。

